關西大學新報

発行所
関西大学新報社
大阪市大淀区長柄中通2
電話(358)2271
発行人　村井弘二
編集人　坂本早功
(一部　10円)

古本全般売買
天牛本店
道頓堀中座前
電話(211)二七五八・九番

バリケード中での抵抗

明大学費大幅値上げに

―無期限学園封鎖―

現代社会への挑戦の情況

学生会館における学生の自治権擁護、学費値上げで、戦後の学園闘争としては空前の盛り上がりをみせた早稲田大学闘争―それは単なる学園闘争ではなかった。団交と集会とデモが連日、連夜、続行され、総長との団交―確固たる官僚体制を築いた大浜総長以下の理事―学校側との闘争だけでなかった。れきぜんとした相容れ難い対立関係の存在であり、現代社会の階級対立の透視をなしていた。

これは不可避的に、最高度の戦術として学園封鎖が構築された。学生会館、学費値上げという日常性に接するものから、「真理の大学」構築へ「自治」獲得という闘争へ。発展過程に"権力"の横たわっていることを認識した。そして"権力"をつき破ろうとするあの巨大なエネルギーは、大学側を圧した。学園封鎖をめぐる体育局と共闘会議の激突、流血は、大学側の学生分断、切り崩しの一つである。現代社会国家権力の告発、挑戦である。

「入試妨害は社会への挑戦」であるとうそぶく大学。国家権力は早稲田大学に官憲の導入をもって、この現代社会、国家権力に告発、挑戦するこの巨大なエネルギーを粉砕。"戒厳令"の下で大学を支配した。

二百余人という大量検挙ということから事実上闘争は瓦解、敗退していった。

早稲田大学の共闘会議による封鎖ということは、現代社会の矛盾をぎりぎりの極端まで鮮明化の表現であった。それゆえに国家権力を温存させた。現在の既成左翼の「政治」闘争が、政治性を、経済性＝日常性を触れ得ない状況において、早稲田大学闘争に、政治性をもって、戦術をもって、現代社会の矛盾を熾烈に告発した。国家権力とのバリゲードごしの対峙との情況において、大学権力を圧しえても、国家権力により抹殺せしと容赦なく叩きのめされた。

バリケードを解いた瞬間、「全学ぐるみ」「全学友」「全国学友」の"団結"の空疎な、陳腐な言葉が、現実の重み、エネルギーを「過激」だと現象の水平的次元から「学生の良識」によって分散していった。

こうして早稲田大学も「全学連」のもとに「団結」しよう、一般労働者と一緒にやろうという公式主義から公式主義の「労働者」を物量的に補完しようといい真の"主体者""実体"を欠落させ、国家権力との対峙を、現象の次元で静観し、物量におきかえようと言い、学校権力に環境整備を「要請」する。学校権力は、「学生の利益」をいくらかは考えうる。そして「要請」―「妥協」―を勝利に歓喜しても、本質をついていない。

財政負担の全面的な学生への転化、教育内容における産学協同化、学生自治権の掠奪は、支配階級の再編強化の一環として、権力をもって法規制による抑圧である。国大協の「学生問題に関する所見」なるものは、こうした情況のもとにおける支配階級の大学自治の総合的再編強化であり、次第に権力に屈服してゆく国立大の姿があった。

それは関学の薬学部新設反対（既報）大阪学大の「教育大学」への名称変更反対闘争、秋田大、横国大、長崎大などの、緊張した現実につぎつぎと展開されている。

大学の大衆化現象の中で学生にとって現状の大学に、知的行為、創造の場としての大学が自己の存在さえも自覚できないよう空洞化している現実にこれに対し、学生は思想的立脚点としての大学に、創造しようとする「大学は学生、教員法人（職員）が対等で構成される」という学生の自治権の主張は、学生の意思を大学行政に反映しそれを保障せよということである。

理事に学生が入り、教学事項にも学生が携させるということに対して学校側は一般的に「社会的に弁済能力を有しない学生が経営担当者になることやもしなったとしても、金融のために学問の徒がとびまわれるかということ、またカリキュラム編成にしても学生が専門家たる教員より能力があるかというと、これらも学生は無理で対等ではない」と大学の経営主義的膨張の空洞化、矛盾を陰蔽し、事務管理能力の問題としてすりかえ、切り換えてくる。そして学生の創造への運動を「一部学生活動家の煽動」と大学当局はうそぶき強硬路線のもと学生分断政策に狂奔している。これでは大学の共同体は解体せざるをえないのだ。

現在、支配階級の再編強化の一環とする文教政策において、その情況の変化に対して学園・教育闘争は、不可避的に極めて政治的性格を帯びざるをえない。闘争の総体性への不可欠な要因として鮮明化せざるをえない。

より長期に　より権力との　対峙の情況を

バリケードの中の自主管理。「真理の大学」への創造を、大学の「自治」への獲得へ情況をつくり出すエネルギーは、十二月二日、明治大学神田本校において、学費値上げの白紙撤回を要求して、全学闘争委員会の指導の下にストライキに突入し、全入口にバリケードを築き「自主管理」に入った。一足早くストライキに入っている和泉、生田地区を合せ、さらに学苑会（夜間部自治会）が闘争に参加することになり、バリケードの構築は学校権力への対峙の巨大なエネルギーの象徴である。

自主のカリキュラムによる学園"自主管理"それは大学教育の空洞化などの矛盾の現状に対し、大学側の経営主義的な値上げによる矛盾の拡大に対置させる大学共同体への創造である。

"知的創造"の場としての大学は労働力商品の大量養成所化として大衆化現象の中に、現代社会の階級対立の要素は不可欠として厳然と横たわっている。

労働者階級の意識が、資本主義における生産過程の資本の支配と搾取に抵抗する意識と、市民的意識とに引き裂かれている二律背反の情況のように、学生大衆の意識も二律背反の情況のなかにある。学生大衆は、労働力商品の効率を良くしていこうとする準備過程の体制的意識と、日常性に接する体制の矛盾の累積、それの認識の過程は体制の権力へのアプローチへの可能性を強め、さらに人間性の回復しようとする抵抗意識に引き裂かれた二律背反の情況にある。

この二律背反を認識させ、このもとに立脚する学費値上げ反対の意識はバリケードの中の抵抗である。それゆえに大学権力、国家権力との対峙体制として、対立関係が激烈にぶつかる。それゆえ大学権力、国家権力の闘争破壊への必死の策謀が続々とでる。それとの実力の対立である。

「明治大学愛校行動隊」と称する黄色のヘルメット、アノラック、Gパン、バスケットシューズに身をかためた約八十人が、怒号と共に数人が正門わきにある守衛所を襲い、ガラス窓、電話受話器などを破壊し、そこに宿泊していたスト派学生三人を、外に引きずり出し半裸にし、これに暴行を加え、約三週間の重傷を負わせた。スト派の応戦。正面のバリケードの撤去し退散する。

早稲田大学闘争における体育局の学生の封鎖解除、しれつな乱闘。学生の秩序を回復する良識派であると嘯えるのだ。恥かしいことだとしたり顔をするな。権力者側の策謀と尖鋭に対峙しなければならない現代矛盾の止揚、抵抗の意識を弱体化するな。対立がし烈であればある程、権力をつき破ろうとするエネルギーが学校側は圧しえても、後方にそびえる国家権力が官憲の導入をもって抑圧を打破することは不可能であったということを実証してみせた。

バリケードの中の自主管理というより長期に、より権力との対峙の状況をつくりだしていく、ということを、"良識派"では何ら語ることができない。

私学においては体育局（部）は学生会に占める力が相対的に強く日頃の学生自治活動の「政治的」なものへの反感から、大学当局と手を結び易い状態にある。そして大学当局の自治活動への切り崩しの担い手となり"過激"だと本質を没却し、現象次元で批判し、静観している学生の心理にくいこむというところがある。そして日共＝民青＝全学連連絡会議下のグループは、またバリケードを極左的と批判する現象的批判は、「大学封鎖は不法占拠」と通ずるのである。おかしなもの。

反体制運動故に権力者は、早大闘争のような「憂慮がされる」「学費値上げ反対の全学ストは、三派連合の全学連再建大会を景気づけ祝賀する"打ち上げ花火"」と大学当局に学校秩序を回復せよと打ち出している。

学費値上げの全ての問題をすりかえ、抹殺が、センセーショナルに容赦なく叩くという。野党精神を微少もなく喪失した水ブクレ豚商業新聞資本と学生を搾取の対象とす大学資本とここに結合する。

明大愛校行動隊が、乱闘のさい「七十年安保まで俺たちは頑張る」といったことは、明大に関係を持つスト反対派の右翼団体―真向から「対抗団体」として権力側の担い手として学生分断抑圧勢力となろうとする。

理事会の大幅の値上げ案はA・B二案あり、B案によれば学部では入学金五万円（現在三万円）授業料文化系八万円（現行五万円）理工系十二万五千円（現行七万円）短大では入学金四万五千円（現行二万五千円）授業料六万六千円（現行三万六千円）という、学部六〇％、短大一〇〇％の大幅な値上げ率であった。

武田学長など全理事との大衆団交にたいして、学生側は学費値上げを含む理事会側の教育問題に関する基本方針を追求して行くのに対し、理事会はあくまで問題を金銭的問題にすりかえ、値上げを合理化しようと企てる。これは大学を経営主義に徹し国家権力政策への呼応であった。団交はあくまで値上げをしようとする強硬な理事会と、白紙撤回を要求する学生との激烈な対立をたどった。

バリケードの中での自主講座、学園の自主管理でもって試験ボイコットも辞さずとする闘争は、明らかに現代の矛盾の社会へ挑戦している。学生の二律背反の意識をより鮮明化と現象している。闘争は経営者対学生とのし裂な対立を現象化する。

アサヒグラビアより転載

明治大闘争において学生大衆自身によって造りだされたバリケード中での学園封鎖、自主管理という情況は、学生大衆の二律背反の認識、それへの止揚のプロセスへの創造であり、闘争勝利への自由の発展形態である。それ故に国家権力、学校権力の学園自治切り崩しに対峙するもの。この極限の、極端の情況を全体としてすき勝手に紹来することができないと同様に勝手によびおこすことはできない。

早大闘争が二百余名の大量検挙と、バリケードの解除という瞬間において、急速に敗退とかわった。このように退潮時には、プチ・ブル的な無批判な逃避にかなりの層をひきづっていた。そしてプチ・ブル的なとりこになった。

闘争の深化の極限の情況が、政治的・階級的性格を不可避的に帯びざるをえないのであり、闘争の限界をいかに突破していくのかが今後の運動にとっての焦点となる。

そして関大においても授業料値上げの危惧が日常性のなかに迫っている。関大の経営主義的膨張政策と国家権力の融合としての去年の新学部、学科の設立に反対闘争を展開しえなかったという情況が輪をかけている。支配者と被支配の究極の両極端の情況は何か。

論説

学費値上問題へ警告

六四年学費闘争敗北をくりかえすな

闘う学友会創造が急務

安保闘争以来分裂と低迷を続けた学生運動の潮流は、三派連合が全学連結成を目ざして結合することによって、民青系、革マル系とともに三つの流れにまとまり、新しい転機を見出すこととなった。他方、日本独占資本は市場の再編強化の中で産学協同路線強化を再確認すると同時に学生運動、労働運動に対する規制を全面的に準備している。特に教育問題の重要視は教育行政のあり方に抜本的メスを入れる時期であるとして国公立大学を全面に立てた。こうして周到に準備されつつある国家独占体制とこの体制的要求としてのいわゆる「人づくり政策」は国立大学協会などの学生問題に対する発言の中にその意図を十二分にくむことができる。

こうした中で先の早大事件、現在なおも尖鋭に闘われている明大闘争等、私学においては、学費問題を基軸に激しい闘いが血しぶきをあげている。しかもそれは全国的に学園闘争が現在、日本の社会体制そのものの矛盾を内包する極めて深刻な状況を内に潜めているという意味において象徴的である。闘いの激しさは、単に学費問題に終始し得ない問題としてとらえなければならない。それはまた、形骸化された自称〈前衛〉政党の論理でもってしては説明し得ない日本独占資本との対決の前衛でもある。

こうした状況の中で私学は、一方において経営主義的教育方針と、他方における私学の国家独占への身売りによる産学協同路線上へのワク入りにより、学生間との対立は深まり、特に学費問題を基軸とした紛争はますます激化するであろう。

関西大学における状況も例外であり得ない。昨年来の社会学部設置問題においてその方向はむしろふてぶてしいまでに悪辣であった。しかもこの社会学部問題は単に私学経営の一般的方向としてのみ見ることはできまい。四十三年度学費値上げへの前提として理解すべきであり、四十二年度は三九年度に引き続き、再び学費問題を基軸に学園は大きく流動化するであろう。

そこでわれわれは、四十二度に提起されるであろう学費問題に対し、強く警告を発すると同時に三九年度学費闘争の運動論的総括を反省し新しい闘争への方針提起をし全学友に二部天六学舎の危機を訴えたい。

〈I〉

三九年度学費闘争の総括の前にわれわれ学生に取って学費闘争とは何かを明確にしておく必要がある。

言うまでもなく学生としてのわれわれは大学当局の経営担当者のむし熱いほど暖房のきいたふくよかな椅子を守るために学費を支払いに学校へ来るのではない。あらゆる学生が、切りつめられた生活に耐えながら「学問」をするために登校するのである。「学費」はわれわれの学籍の権利であり学籍の権利はあらゆる学問の出来る環境と条件を要求する権利を留保している。それはまた大学の構成員としてのあらゆる権利をも要求出来なければならない。反面大学そのものの社会的存在はわれわれが自分たちの権利関係のみを維持すれば良いということにとどまらず社会的立場として大学行政のあり方を正す義務を持つ。学費値上げは常に現在（学生）でない者に対してなされるのであり「学費値上げ」はわれわれの生活権の否定でもある。

従って学費闘争は単なる〈私学経営〉のみの問題ではなく学生としての権利闘争である。それだけに学費闘争は「生活権」をかけた闘争であり激烈でなければならない。また同時に学費値上げは単に、学費が値上げされるので反対することではない。私学において学費値上げ問題は私学運営の基本的あり方に問題があるのであり、それらの奥深い矛盾の象徴的表現形態として学費問題は登場するのである。従って闘争形態は単に学費反対！のみに終止してはならない。

私学経営の基本問題をつきつめた場合、現代の日本ブルジョアジーの文教政策そのものへと突き進まざるを得ない。しかし直面する学費闘争の中で〈私学経営の矛盾→国家の文教政策の矛盾〉という論理構成は極めて危険であるということに十分注意する必要がある。すなわち学費問題は、その大学内の経営的問題の解決としてわれわれに提起される。

直面する争点はこれを提起した大学権力との対決である。われわれは大学権力との対峙においてわれわれの一切の権利を主張し防衛することである。決して国家権力との対決ではない。三九年学費闘争においてこの典型的誤謬を犯した民青諸君は大学権力を取り囲み白熱化した二千名の学友の前で「米帝国主義に従属する国家権力に対し学費値上げ闘争を挑め」といって追いつめられた大学権力と手をむすぶという醜態を演じた事実を忘れてはならない。

私学における学費問題は大学権力によってあたかも切迫した経営的危機を解決する唯一の手段のごとく虚飾されて提起してくるのである。しかしわれわれ学生にとっては正に死活の問題であり、生活そのものの圧迫であると同時に、われわれ学生のあらゆる権利を弾圧しようとする大学権力の策謀である。われわれはこの事実を鋭く分析し、学園生活におけるあらゆる権利を要求しながら私学運営の根本的機構にまでメスを入れるダイナミックな闘争を展開しなければならない。そして直面する敵は正に大学権力である!!

〈II〉

「一九六四年度学友会は学費値上問題を目前にひかえながら全くなすすべも持たず、学費闘争をするのかしないかさえわからない状況にあった。すでに学友会成立の時期において数度におよぶ選挙のトラブルを起し全学生から糾弾され、全パートから批判される中で体育会が権力を握ったのである。従ってすでに学費闘争の見通しはなかった。それは数年来「学友会予算」ほしさに学友会権力を暴力的に奪取し、学校権力と密着することによって〈学生の代表〉ではすでにあり得なかったからである。

大学当局はこうした学生状況を前提に学費値上げを準備し前期試験直前に極めて形式的な通告を学友会に対して行なった。しかし学友会執行部は自治委員会をも招集出来ずいたずらに時期を遅らせ大学当局の時間かせぎに協力したのである。この事態は以後の闘争経過そのものの中で極めて重要な影響を持つことになり、いかに学友会執行部が犯罪的な役割を果したかを物語るのである。

闘争委員会が結成されたのはすでに十月も相当経過した時であった。執行部三名をふくむ十数名の闘争委員会は執行部の実質的な闘争放棄によりパート関係者及び一般学生を基軸とした形成であった。パート関係者及び一般学生は闘争委員会の実質的権力を掌握することによりまず学友会執行部から独立した機関として独自の方針を提起し、学費闘争に関する一切の交渉は闘争委員会に移譲させることを学生大会によって決定した。少なくともこの決定は重要な意味を持った。

こうして具体的に活動を開始した闘争委員会は学内における闘争を第一段階として全面的情宣活動に集中しこれらの作業へ終了を本格的大衆団交へと切りかえ、狭い理事会室での団交を有隣館へと移して行なった。

この学費闘争の意義と性格を決定づけたのは、秋期学生大会を学費値上げ反対学生大会として位置づけ、学生大会に大多数の一般学生を結集させると同時に、そこにおける徹底的討議が時間的な遅れをとりもどすことが出来たことである。同時にそれ以後の闘争を情宣→大衆団交→情宣という形で展開し大衆団交に一つひとつの闘争経過を集約して行なったことでもある。

しかしこの闘争が過去における学費闘争の中で、もきわだって大きな盛りあがりと激しさを持っていたのは、正に一九六〇年以降急激に増大した学費の負担が天六学舎に学ぶ二部勤労学生の経済生活を極限にまでおしつめ極めて深刻な生活危機をあおっていたことに他ならない。しかも相続く諸物価の値上がりは勤労学生の実質賃金を低下させており、食べる精一杯という状況の中に、また〈勤労学生〉の生活実体を無視する形で学費値上げは提起されたのである。したがって一般学生はこの学費問題に対し、当初は極めて即物的に反応した。闘争委員会はこうした一般学生の状況を大衆団交に結集させ闘争のエネルギーとして闘ったということができる。

果してこの一般学生の状況に対する分析の弱さは、闘いそのものが長期化した場合その有効性がうすらぐことを見落したといわざるを得ない。それは日常的な学友会活動において一般学生をある一定度組織化している限り問題はない。しかし現在もそうであるように極めて基礎的な指導能力をも持たない学友会執行部は完全に一般学生と遊離していた。この現実に対処するには、即物的要求を内包しながら結集した一般学生を、闘争が最も盛り上った時期において少なくともその五〇％は組織化していなければならなかったのである。六四年闘争はこれらの作業の遅れにより、後半が急激なしりすぼみとなった。そして闘争が最高潮を過ぎた頃から体育会を中心とする右翼分子の内部撹乱、闘争妨害が活発化し、ますます後退して行ったのである。

ここにおいて全学生の大同団結統一戦線の幻想への誤りがあったと言える。過去一貫した体育会の分裂活動は、闘争が頂点に達する頃から開始されるという悲しむべき関大の現実を忘れて妥協を続ける限り学費闘争の勝利はあり得ないのである。学費闘争は非妥協的闘争である。早大事件にもみられるごとくヘルメットと棍棒をもって校舎の入口に構築されたバリケードへなぐり込みをかけた〈良識ある学生〉と妥協することは決して学費闘争が要求する全学生の大同団結ではない。この事実に対する認識があの学費闘争において抜けていた。

しかもこのような混乱が始まったとき、スト権確立の学生大会を開いたのである。結果的には、内部矛盾をくすぶらせながら進展していた闘争委員会の対立を顕在化させるきっかけを作り、体育会が公然と学費闘争の妨害を始めるきっかけともなった。そして闘争は指導部が混乱することによって指導力を弱め学年末試験開始がその闘争にとどめを刺したといえよう。

あの学費闘争がきわめて大きな盛りあがりをみせながらも結局敗北に終らざるを得なかったのはあまりにも学友会の組織的統一が欠落しており闘争そのものを組織的に発展し得なかったことである。そして、また指導部たちのものにおいてもほとんど思想的立脚点をもたない集団でしかなかったことでもあった。

〈III〉

来年度学費値上げは先にも述べたごとく大学当局に取ってもはや既定の路線である。われわれ勤労学生に取ってそれがどういう意味を持つかはすでにいうまでもない。そしてその闘争を再び敗北に終らせることはできない。

現学友会（体育会の私物と化し真の学友会は存在しない）にいかなる幻想も持つことはできないのである。学友会が真に全学友の手に戻らない限り来るべき学費闘争を闘うことは不可能である。学友会そのものを全学生の手に取り戻し、学友会の日常活動の中で思想的強化をするとともに過去の学費闘争の誤謬を再び繰返さない闘いを準備しなければならない。

行事日程表

一月二十三日　学年末試験開始
二月二十一日　学年末試験終了
三月十三日　四年次成績発表
追、再試験受験時間割発表
〃　願書受付
三月十五日、三月十八日
追、再試験
三月二十日　卒業式
三月三十一日　追、再試験成績発表
四月一日　四十二年度時間割発表
〃　履修届用紙交付、演習受付
四月四日　新三年次生成績発表
履習届用紙交付
教職ガイダンス
四月五日　新二年次生成績発表
履習届用紙交付
教職ガイダンス
四月六日　新三年次生履修届受付
四月八日　入学式
四月十日　二年次履修届受付
四年次演習履修者発表、受付
四月十三日　授業開始

学声春秋

▼試験[illegible]た×曜日。Q教授曰く「今日は大勢お見えになっていますね」正しくどの講義も大盛況である。普通は全く講義しやすい、教授の声がききとれやすい講義であっても、満員となる。ところが皮肉とも自潮ともつかないこのつぶやきをもらすQ教授にとって、この言葉は例年の習慣となっているのだ▼あいつの講義はつまらねェし、試験もどうっていうことねえゾ！という定評が立つものならおしまいである。"現代っ子"の要領の良さに切りかえされるというわけらしい。反面われわれにとって職場と会社と自宅との間の三角点を結合させるにはこれぐらい必要なのだ▼学生が涙ぐましいまでに単位取りに苦心するのはなぜであろうかと試験期になると幼稚な一般的な疑問ばかり。大学創設期に見られたあの生々とした建学の精神はもはや消え去ってしまった。学生として自由に考え、主体的な創造意識の場知的な場は、大学の大衆化というもとに彼岸に怒涛に流されていった▼単に「就職のために」「肩書欲さ」「現在は大学に行かなければ」という学生が圧倒多数を占めていることは事実。まさしく大学の大衆化は"教養をもった社会的人間の形式"といった美名のもとに経営規模を拡大し"教養"に抗するものを排除した。実に魂のない教養がウロウロと悲しい否めない事実▼裏を返せば「肩書」は社会の標識、認識ナンバー。そして「"実力"主義時代招来、到来」とあたかも肩書に対立する如き幻想をまきちらしている。「あなたはスペシャリストにならなければ生き残ることはできない」「スペシャリストのための本」「スペシャリストになるには」とか似たりよったりの"how to"の洪水化。要するに科学にいかに対処するかという共通項がもとめられ、抵括でくれるという次第だ。定時制高校に"服装科"などの職業訓練的なものが"現代社会の要請"というもとにとびだす今日この頃。まことに便利なこの語句▼科学は生産手段化しているよりも利潤追求の手段化という情況の反映である。労働力の商品化から資本主義の矛盾が招来する。現代国家、社会秩序を固定し、流れるは科学というらしく現代体制の維持。"スペシャリスト"なるもの現代体制に安閑とのっかって、いかにうまくやるか。"要領"―"科学的"というのだ▼さて現代日本は"ガン"を国家と、官憲にほとんど独占されているが、所持を許してはどうだろうか。ガンブームにのって格子がよい！ソンナ安直なものじゃない▼過去のアイルランド人民の長い抵抗史はなにも貧しかっただけでなく"ガン"をもって、イギリス帝国主義の圧制、圧倒的軍隊と対峙したあの"姿勢"だ。われわれにとって必要なのは…。"あの…"ともどかしい声がどこからか。うっちゃっておけ！▼虚空間に一つの"もの"を。もののみごとに木ッ葉微塵にさせつきぬけに狙いをつけ射る。人間と虚空の間に一つの"もの"を、ものの みごとに木ッ葉微塵にさせつきぬける感触。こうしたゲリラ的な姿勢こそが、精神領域の冒険であると共に人間性への復権への接点があるのではないだろうか。

41年度 就職決定者名簿

四十一年十二月三十一日現在

内一商事（経）市原正義
龍村美術織物（法）宮田博
山田商事（国）吉崎弘美
理研化学工業（法）服部正誼
加藤メリヤス（商）上殿忠彦
岐阜県教育委員会（商）栗田雅昭
近宣（新）福岡恭彦
品川商店（英）大森勝
太平グループ（経）佐藤好弘
〃（〃）木全尚志
日米礦油（経）出口俊明
枚岡市役所（法）辰巳証
万年社案内広告（経）原田守
モルタ事務機販売（商）日根時興佑
石原ヒーター製造（経）梅沢秀雄
菊水ＫＫ（法）阿部亘
寺崎商事（商）水辞進
兵庫県人事委員会（法）垣内光義
〃（法）北村孝雄
森田特殊機工（商）深川元政
泉佐野市役所（法）中出治
江口商事（経）松岡忠
大阪レーリング印刷（経）今井敏昭
大阪有線放送社（商）渥江清晃
新日本酸素（法）佐々木勉
星電社（商）藤本佳昭
愛知日産自動車本店（経）札辻徳晃
ナニワ印刷（経）行本達元
丸大紙業（経）宮家康一
阪神電気鉄道（商）大國喜哉
小田殖産（経）前田顕助
昭和興業（商）溝上吉嗣
大信ペイント（経）上田進一郎
大同産業（経）山県清
智弁学園高等学校（経）柏田数利
野呂克（商）佐川健
天満屋本社（経）柴田哲昇
プリンス自動車販売（経）和田俊光
平和生命保険（法）飯尾栄司
マルマン（経）中井正虎
ヤマナカ（商）斎藤克己
大阪トヨペット（法）岩田宇純
大阪府警察本部（国）近江敏明
キディランド（経）三橋博文
太平グループ（経）上田正巨
寺井運動用品（経）長谷川寿一
兵庫日産自動車（法）原井昭夫

関大生協天六支部

岩波　42年版　基本六法　収録法令二七七件、新収録5件　定価550

有斐閣　42年版　小六法　収録法令一九七件　新収録5件　定価500

戦後はじめての本格的　経済学全集　全六巻
◎現代の問題意識に立脚し、世界的視野のもとに編集された。
◎経済の原理・構造・体制・動作を平易明快に記述する。
◎わが国マルクス経済学近代経済学の第一線で活躍中の百余名が参加執筆。
◎各巻末に別冊文冊子を、また各巻末に経済用語が参考文献索引を付す。
筑摩書房

中国の発見　ボーヴォワール著（紀伊国屋書店）

中国文化革命　その資料と分析　中島嶺雄

燕山夜話　付三家村私記　鄧拓　毎日新聞社

革命の思想とその実験　梅本克巳　三一書房

自立の思想的拠点　吉本隆明
既成の諸国家論を断罪する新設定は大衆論の展開または「家」論の「発展」とみなされる。

ああ同期の桜　毎日新聞社
かえらざる青春の手記　戦後国家の追撃のなかで、父との無言の断切を

日本詩人全集　全34巻　各三〇〇円　新潮社

邪宗門　高橋和巳　河出書房

現代官僚論　松本清張　文芸春秋

中国革命への視点

〝異端〟を正統とするが後進国の〝革命〟をどうするのか

村井弘二

中国文化大革命─日本で「毛沢東語録集」をかかげた紅衛兵の集団の存在と動向がマスコミを賑わした。しかしそこに日共と中共との対立あるいは米中戦争の可能性または権力闘争（抗争）等々と無意味な非生産的な評価がそれらに積み重ねられており〝自主独立〟または〝それでも日中友好〟などの弱々しいものぐらいから、中国の核実験を〝日本国家、民族の安全保障〟というもとに日本の核武装への動向がみられる。さらに国際共産主義の中ソ対立が輪をかけている。

しかし、これらは、根底的問題、即ちプロレタリア革命、あるいは後進国革命の課題について語りえるものであるとはいいがたい状況である。

新報社では、一八二号に小池君の中国現地ルポ、さらに中国共産党の地方的共産主義の矛盾としての文化大革命を掲載した。今回は、ソ共と中共との権力の比較をとおして、農民層に立脚した紅軍を軸に政権樹立した毛沢東主義に引きいられる中国共産党をボルシェヴィキの直系それを〝代行主義〟と命名し、一般的には後進国における農民層の多大性という特殊的要因に結合させ、中共を後進国革命理論の担い手として〝不断の革命〟と評価するドイッチャーの「毛沢東主義」（新潮社刊）をとり上げた。

ドイッチャーはこの中で〝代行主義〟〝不断の革命〟を基調として国際共産主義運動の異端としての毛沢東主義の評価を、マルクス、レーニン主義に基づいた共産主義として承認迫っている。これは現在ソ連を中心とする国際共産主義をスターリン主義を克服できえていないとし、それに対立するものとして〝異端〟としての毛沢東主義を地位付けている。しかしここにドイッチャーの中国革命への経過と現代への透視の誤謬がみられる。

I・ドイッチャー著「毛沢東主義」

反スタから〝代行主義〟〝不断の革命〟

ドイッチャーによる毛沢東主義の規定は長い引用であるが次のようである。

「マルクス主義は、ロシア経由で中国への道を見い出した。（中略）それからマルクス主義が中国の土壌にしっかり根をおろした力とは〝複合的発展の法則〟のおどろくべき、すさまじい実証である。ここでわれわれは、世界でいちばん古風な国民が、いちばん近代的な革命的理論、革命のもっとも新しい言葉を、貪欲に吸収し、それを行動にうつしているのを見るのである。

自国にマルクス主義の先祖をひとつももたない中国共産主義は、ボルシェヴィズムの直系である。毛沢東は、レーニンの肩の上にのっかっている」（十頁）

「毛沢東が中国革命は純ブルジョア的性格であるとくりかえし、執拗に主張したことは、パルチザンが農民と完全に一体になっていたことと、よく合致した。何千万の農民大衆にとって〝不断の革命〟つまり、土地問題を解決し、中国を統一し、そしてまた社会主義革命を開始する革命の展望は、無意味であるか、またはうけいれがたいものであった。（中略）一九四九年に都市を占領した後になって、はじめて毛沢東主義は不断の（永久）革命の不可避性にぶっかり、その命令に服したのである」（三十六頁）

「都市は、古い労働運動の残存部が活気をえて、あちらこちらで蠢動したことはあったにしても、政治的にはほとんど死んでいた。ここでわれわれは、巨大な規模での〝代行主義〟の現象、つまり、ある不在な、それとも無活動な社会階級を代表する。もしくはその代りになる、党または一団の指導者たちの活動に直面する。（中略）ロシアでは（中略）内戦後には、労働階級は完全な経済の破滅と工業の崩壊のさなかで解体し、分散してしまった。ボルシェヴィキ党は、その代理となり、そしてまた、革命の受託者、保護者となった。ボルシェヴィキ党が革命後何年かしてはじめてこの役割を引きうけたとしたら、毛沢東主義は革命のずっとまえと革命中にこの役割を引きうけた」（四十頁）

以上のようにドイッチャーによる毛沢東主義の評価は、中国における革命の主体者としてのプロレタリアートの不在にもかかわらず、毛沢東と中国共産党はプロレタリアートの代行者となって農民革命を社会主義革命の段階へまで発展移行せしめたとする。この重大な転換を「ただイデオロギー的制約のためばかりでなく、また重大な国民的利益に駆られてそうしたのである」と簡単明瞭にナショナリズム的に評価にとどまっている。

ドイッチャーにとってこのことよりも、〝代行革命〟─〝不断の革命〟を、永久革命論の継承、あるいは同等的であるとして、一国社会主義論に立脚したスターリン主義によって暗黒の闇に埋り去られた永久革命論の蘇生として〝不断の革命〟─毛沢東主義にみようとする。そこから〝異統〟とされる毛沢東主義を〝正統性〟として承認を迫まっている。

〝永久革命論〟

マルクス主義の根底

永久革命論は、ソ共におけるスターリンの一国社会主義論と激烈に論争、対立したトロツキーの理論と、一般化されている。しかし永久革命論は、マルクス・エンゲルス共著『ドイツ・イデオロギー』にその理論の萌芽が─プロレタリアートの解放の基底としてまさに重要─ある。

「ただの労働者たちの大衆─大量的に資本から切り離され、またはどんなにつつましい満足からもきりはなされている労働者勢力─は、したがってまた一つの保証された生活源泉としてのこの労働そのもののもはや一時的ではない喪失は、競争を通じて世界市場を前提する。だからプロレタリアートはただ世界史的にのみ存在することができ、おなじくかれらの行動である共産主義も一般にただ『世界史的』存在としてのみ現存することができる。諸個人の世界史的存在とは、直接に世界史とむすびついているところの諸個人の存在のことである」

これは単に一九世紀の産物であり二十世紀の後半の現在には通じないとするこのような〝世紀〟によって断絶することはできえないのであり、まさに帝国主義的資本主義体制の今日の階級の情況にとって〝今日的意義〟を帯びている。プロレタリアまさに〝矛盾〟の集中的表現として労働者階級の手によって推進されるべきものであり、たとえ農民の大きな助力があろうとも農民が指導的立場となることはない。そしてプロレタリア革命は、ブルジョア権力と真向から相対立する歴史的必然性の過程であらゆるブルジョア諸権力を〝プロレタリア独裁〟体制の形態にとりかえる。

このようにプロレタリア革命は〝特殊な抑圧機関〟としてのブルジョア国家を〝止揚〟する。その革命は「プロレタリアートが精神的にまだブルジョア秩序を本来的に合法的なものと感じている時期に、そしてそのような精神状態のもとで権力を奪取しなければならない」だからブルジョア秩序を合法的なものとしている精神状態を、単なる〝革命〟ということでもって破壊することはできないし、〝革命委員会〟なるものによって作られた新しい秩序にも簡単に従うものではない。〝プロレタリア独裁〟という体制、期限を通じて、ブルジョアーイデオロギー、秩序を粉砕して行かねばならないとするわけである。

レーニンは「現代の歴史的諸条件において（中略）都市は不可避的に農村を導いていくものであり農村は不可避的に都市に従うものである。唯一の問題は、どの都市諸階級が農村を導いていくかということである」と述べており、さらにトロツキーは「労働者の代表を含まない革命的民主的政府を想像することは、次の情勢のような不合理を夢みることになる。もし労働者が革命的政府への参加を拒否するならば、その政府の存在そのものが不可能となるであろうし革命の大義を裏切ることと同然であろう」

「しかし革命的政府への労働者の参加は客観的可能性からみても主観的願望からみても、指導的な卓越した役割を演ずるばあいにのみ容認される。（中略）こうした政府を「労働者と農民の独裁」とか「プロレタリアートと農民とインテリゲンチャの独裁」とか「労働者と下層中産階級の革命的政府」とか呼ぶことができる。しかしつぎの問題が残るであろう。誰が政府の中で、そしてそれによって国の中で、ヘゲモニーをとっているのか？労働者政府について語るときわれわれは、ヘゲモニーが労働者階級に属していることを意味している（中略）民主々義革命の指導者として権力の座にのぼったプロレタリア独裁は不可避的にかつ急速にブルジョア的所有権の深刻な侵害と結びついた諸任務の前に直面させれる。

民主主義革命は、ただちに社会主義革命に成長し、それによって永久革命となる、という階級矛盾の必然的論理として労働者、抑圧人民が過渡期的に支配層として組織─独裁─され、階級対立の止揚の帰結をもってする」

「不断の革命─すなわち激化する社会的衝突、次々に新しく起る人民の蜂起支配階級の政治的および経済的特権に対するプロレタリアートの間断なき攻撃等によって絶対主義と農奴制の清算を社会主義革命に結び付ける」と規定している。

毛沢東主義の中国共産党の〝紅軍〟〝党〟による政権樹立過程は以上の点と異っている。

このことは毛沢東はしきりに「プロレタリアートに指導された労働者、農民を主体として、その他の広範な社会諸階層が参加した反帝反封建の革命＝新民主主義革命」であると公言していることからも裏付けられる。（プロレタリアートに指導→党に指導であろう）

中国の君主独裁制の中央集権体制における独立小農民、商人、手工業者などの階級に支配体制に組み込まれて、近代的な資本家、農民が自らの体制─（清王朝を打破し、ブルジョア体制）へ動き出す前にいやおうなしに世界の資本主義体制の市場にひきこまれ、半封建半植民地という特殊性を引き起した。しかし労働者階級の増大となって、ブルジョアジーをおいこして成長していく。それが日帝排撃、平和条約反対を叫ぶ学生、労働者のストライキ、中国ナショナリズムを基調として民族解放、反帝運動が展開し、二一年中国共産党が結成され、さらに無政府主義的影響の二三年の京漢鉄道のストライキと中国全土に反帝国主義闘争が激しい波及していく。

しかし、スターリンに率いられるコミンテルンは蒋介石および汪精衛らを正統の指導者として認めるという日和見的指導、さらに抗日戦線運動のもとに反帝国主義闘争を解体させ、国民党に代表される民族ブルジョアジーと小ブル層との同盟関係を要求し、二十四年から二十七年までの国共合作となった。ここでコミンテルンは国民党の党員になり、革命運動をいっしょにすすめようと要求した。中国を奴隷化、植民地しようとする日本の対中国戦争化自に対する己解放のための対日戦争は、国際労働者階級の階級、解放闘争に必要な一環であり、スターリンの指導にトロツキーは「民族の先頭に立つ労働者階級のみが、民族革命ないし農業革命を徹底的に遂行することができる」と弾劾する。

ところが、まさに前衛党としての任務を、主体を切断し、「民主的」の理想にみちびいた国共合作は二十七年四月の蒋介石のクーデターにより国共合作は結裂し、さらに上海、重慶その他の都市におけるゼネストをはじめとする革命的運動が圧殺され敗北し、さらにスターリンの指導により広東暴動の圧殺と続き、（中国において破壊的政策をとる）さらに独自の行動をとらなければならない状況になってくる。

都市労働者階級の革命的運動のスターリン─コミンテルンの指導による崩壊は土地革命闘争を基盤とした毛沢東主義の抬頭である。中国の独自性、そして中国の経済体制を農民共同体的社会主義の理想化とするナロードニキ主義的である。

ナロードニキ的毛沢東主義

それゆえ毛沢東主義の中国共産党の政権樹立の過程において労働者階級の役割を果しえなかった。

このナロードニキ主義的社会─中国─変革の担い手は農民であり、積極的な農民闘争工作（「湖南農民運動考察報告」二七年）で農村を根拠地理論に依拠した〝武装闘争〟─ゲリラ闘争─であった。（付記、それは毛沢東によれば「中国では武装闘争といえば実質的には農民戦争であり」「党と農民戦争との密接な関係こそ党と農民との関係」〝共産党員〟よりからもうかがえる）

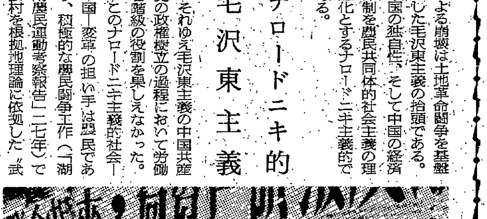
紅軍の組織化、解放区の形成のこのナロードニキ的毛沢東主義に新しい中国変革を担うものと展開する。

ロシア・ボリシェヴィキは、レーニン、トロツキーらの指導の下に農民を指導する労働者階級の蜂起によるプロレタリアート独裁としての権力の掌握とはまったく異質である。

一八六九年国際労働者協会第四大会決議のなかに労働者階級の同盟者と〝農民〟の歴史的位置付、社会主義権力の意義が明確に表現されている。こうである。「工業労働者に資本家が対立しているように農業労働者には地主もしくは大借地農業者が対立している。

産業労働者は、ブルジョアの資本（すなわち原料、機械、工具）と生産にどうしても必要な生活資料とを社会の所有、すなわち彼ら自身の彼らによって共同に利用される所有に転化する場合にのみ、自己を解放しうるのだ。同じように農村労働者はなによりもまず彼らの主要労働対象たる土地そのものが大農民やもっと大きな封建貴族の私有からひきはなされて社会的所有に転化され、こうして農村労働者の協同組合によって共同計算で耕地されるときにのみ彼らのいうべき貧困から解放されうる。そしてここでわれわれは土地所有を共同の国民的所有に転化するのは社会の利益である」と。

しかし、解放区の形成の主体者は農民兵士であって、そこには地主階級打倒であり、貧農を中農に自作者として彼等の所有農地を保証し、農民共同体を理想化するナロードニキ主義的毛沢東主義は、私有財産制を完全に廃棄することを望まないのであり〝資本〟体制と鋭く対立する労働者階級との断絶が出てくる。


「中国文化大革命」をめぐって

アサヒグラビアより転載

だから中国革命は、階級を止揚し、社会主義への〝プロレタリア独裁〟の歴史的使命への経過の担い手プロレタリアートによる革命ではなかった。

そして社会主義革命への第一段階＝新民主主義体制が引き出され後進国革命がプロレタリア革命との結合の疎遠であり岸視されている。

〝民族〟対立を現代革命として提起している。さらに経済体制を、合営、人民公社という「国有」を利用していかに一国の生産力をあげるかということに帰結させている。

この人民公社運動の大躍進の失敗は「経済主義」─反動体制─抬頭をみせ、中国文化大革命、紅衛兵として国内的矛盾の顕在化として出て来ていることがみられる。

このナロードニキ的に変形された中国革命を、〝代行革命〟そこに毛沢東主義のスターリニズムとの関係を鮮明化しえず、ただ「革命」を問題視している。現在の政治的・経済的・軍事的体制に依拠したものを含んでいる。

ドイッチャーがスターリニズム批判、克服へ精力的試みを行なっているが、それが毛沢東主義は〝代行革命〟であって〝不断の革命〟の価値をもっているとして、スターリニズムに対抗しようとする。ところがインド、インドネシアなどにみられるように民族的統一戦線としての国家が、先進国における階級闘争、革命の不在、分断のなかで瓦解している。

「一国においてプロレタリアートが社会主義社会を建設することによって全世界の労働者を激励する」とする生産性の問題を唯一化するスターリニズム[illegible]性を問題とし、自力更生路線をとる中国の経済は酷似している。

このような一国社会主義論は、各国の階級闘争とは結合しえず、分断化の現象を呈し、現在の中国の政治的孤立化とともに複雑に内包する重要な要因であって、それの廃棄が、〝現実的問題〟が、対岸視されている。

毛沢東の『矛盾論』は、現代の最も重要な変革の関係─二つの基本的対立、賃労働と資本の本質的矛盾─階級対立が、資本主義の発展の不均等性が国家の対立が〝民族矛盾〟に置き換えられている。

一方、スターリン＝ブハーリン綱領における資本主義諸国の革命方式が、生産性の問題に置き換えられ、世界階級闘争との必然的結合を、権力、政治的に分断、固定化する一国的、一時的生産力を向上をもって問題の解決をみることはできない。体制間の矛盾として共存体制を固定化する。マルクス主義が〝用意された理論〟と化し自から変革するものを喪失させ、ナショナリズムによって絶対視させてる。この一国社会主義論のスターリニズムは毛沢東主義と密接な関係にある。

ドイッチャーはこの関係を次のように述る「毛沢東が当時革命を遂行するため、スターリンの承認のもとに、スターリニズムの保護色をおびる必要があり」としてスターリニズムとは別個のものであるとの立場をとり、〝代行主義〟を正当化を企図している。

ドイッチャーが、マルクス主義がスターリニズムにおちいってはならないと示唆する。しかし毛沢東主義のプロレタリアートが主体とともに客体であり、変革への観点がみられないスターリニズムへ論述しないで、唯一化することは、ドイッチャーの誤謬であるといえる。↘

後進国革命は、〝代行革命〟によって達しえるものではなく、古代的「コミューン的」或いはナロードニキ的なものではなく、ロシア十月革命というマルクス主義理論実践への下向解明、同時に世界の階級闘争、先進国の革命との結合、環への媒介の一つであるという点にある。「一国においてプロレタリアートが社会主義社会を建設することによって全世界の労働者を激励する」（スターリン）と〝革命〟を後退させ、歪曲させるものでなく、来るべき世界革命の拠点としての根拠地の創造を！

2月中に米原子力空母「エンタープライズ号」原子力巡洋艦「ロングビーチ号」の日本寄港の予定に対して阻止闘争は行なわれるだろう。ベトナム反戦、安保条約への検証のない議会主義的闘争でよいのか。現代世界の矛盾との対峙とは？

ベトナム反戦への視点（4）

二月中、米原子力空母「エンタープライズ号」および原子力巡洋艦「ロングビーチ号」などの原子力軍艦の日本寄港という米国政府の要請に対し日本政府は「安保条約上の権利」として行なわれようとしている。

とくに中共核開発の急進展、ベトナム戦局の流動化という背景のもとでの米原子力軍艦の寄港は、原子力推進軍艦の技術上の安全論議にとどまらず、これらの軍艦の核武装の有無、米軍事戦略との関連にまで論議の拡大が予想され、一九七〇年の日米安保条約再検討の前哨戦として論議を呼ぶものとして単なる客観主義的一般的に注目を浴び、政府、与党対野党、革新陣営の激論が巻き起こることは必至の情勢とみられている。

原潜の寄港に引き続き北爆の立役者として〝海に浮かぶ前線基地〟としての異名をはせる米第七艦隊─原子力空母「エンタープライズ号」および原子力巡洋艦「ロングビーチ号」日本寄港の背後に激化の一途をたどるベトナム戦争とともに、それにともなった米国の世界政策の一環としての極東戦略体制の一層の再編、強化、極東における政治的地位の確保を必至に狙う米帝国主義の露骨な意図をもっていることはいうまでもない。

しかもただ単にそれだけの内容を持っては語りえないのである。

すなわち現代平和、反戦の危機的状況は、それに止まることを意味していないということである。

「米帝の核脅威と核威嚇に対抗する」並びに「各国人民の英雄的な闘いに対する支援である」と称せられて正当性？とする中国の核実験に対して、支配階級─ブルジョワジーは〝国家〟〝民族〟を強調し「日本国家、民族の安全保障」として、巧みに原潜寄港を正当化し原潜歓迎の宣伝活動はそのことを余すことなく示している。さらにその背後は日本のベトナム戦争への加担と、日本独自の軍事力強化─核武装─への布石としての意味をもっている。

しかしこういったことからは「日本がアメリカの基地化される」（日共）といったことにはならないだろう。

日本支配階級は、日韓交渉、条約を勝利的にもぎとり、アジアにおいて日本帝国主義は確固たる地位を築きつつあり、ベトナム戦局面の米帝の侵略政策に呼応する形をもって、現在独自の体制を強化しつつある。

原潜寄港に際しては支配階級が「国民感情」を前面に立てながら「国家、民族の安全性」「安保条約上の権利」と表面的に語り、東南アジアへの政治─経済進出を狙うゆえに「国民の〝一定〟の危機感」を、原潜によってもたされる〝海水の汚染度〟に解消し、原潜の寄港を強行的に行なわれた背後にはベトナム戦争を超近代的軍事力の導入をもって優勢的に進めようとするアメリカ帝国主義の要請を積極的に受け入れることによって日本独自の核武化の布石と、日本支配階級の意図と相まって反対運動に対しての徹底した弾圧を行なっている。

これらの階級対立としての現象に対抗しなければならない現実を原子力空母エンタープライズ号の寄港をめぐる状況の中に察知していかなければならないだろう。

ベトナム戦争は、ゴ政権の崩壊（一九六三年）によって一担その政治的地位の低下を示したアメリカ帝国主義が、それまでの民族資本と結びついていたフランス帝国主義への一程のけんせい、そして一挙的なまきかえしへと、その後は周知のとおり軍事政権を通じたベトナム国内支配の強化と、それを軸として極東全域にわたる極東戦略体制の再編、強化を行なってきたということに他ならない。ベトナム戦争が二重内戦、民族主義的仏教徒の反政府（民族主義的ゆえに破綻）、北爆をも折りこんできている。

米原子力軍艦寄港の象徴するもの

─ベトナム反戦への論理を明確に─

アメリカ帝国主義をはじめとする帝国主義の国内体制の再編成─イギリスではそれが所得政策の破綻などから労働党内閣の反労働者政策への傾斜、西ドイツにみられたドイツ・ナショナリズムを軸にした社民党参加の中道的大連立政権成立にあらわれた階級情勢の新たな局面の展開の胎頭─と結びついて、現在の後進国の階級闘争に対して米国を盟主とした世界資本主義各国は抑圧攻勢の政策を独自の目的追求として打ち出されているという状況である。

日本への原潜寄港、F105D水爆搭載機配備などの動向が北爆開始以降のベトナム戦争の拡大、激化とともに[illegible]いることは事実である「極東の安全のため」の背景は、東南アジア全域におけるアメリカ帝国主義の核戦略体制、支配体制の再編強化であり、これに対して「後進国階級闘争、人民の権力樹立」への抑圧の一環として日本支配階級が呼応するわけだ。このように世界の階級闘争として一の内容をもつベトナム戦争は、中ソの提唱する民族国家による国際会議によって解消するものではないといえるのである。こういった状況をもつベトナム戦争に対して「日本はまきこまれたくない」「民族独立」は、支配階級の国家民族の安全の裏返しされたナショナリズムであり、心情主義的平和主義は議会主義擁護では支配階級にすくわれ資本主義の生みだす矛盾体制へのアタックを欠落せざるをえないというのである。

それは過去人類が二度も経験しなければならなかった世界戦争とその悲惨な結果は、帝国主義のすべての危機の進行を、プロレタリアート自からの手によって止揚し、収拾できなかったということであった。

にも拘らずファシズム体制対民主主義体制との戦争であるとし続けた前衛組織は、これをもって指導された各国プロレタリアートは、帝国主義の矛盾としての結果の全人類の危機破滅に陥し入れたファシズム、ブルジョアジーに攻撃を欠き敗走したことである。

巨大な資本主義国アメリカを象徴する建築華やかな夜会の装飾はまさに巨大な独占資本の表現の側面であり、アメリカプロレタリアートの自からの身体・精神の消耗の屍の上に存在していたのである。まさにこの悲惨な現実を描いたのがスタインベックの「怒りのぶどう」である。

こうした危機の状況の現実の打開の方向、課題はプロレタリアートによる運動の展開でなければならなかった。

しかし、この方向はファシズムに対立する民主主義と虚妄に吸収し、解体されたのである。小ブル、インテリ、既成の前衛組織が何んといおうと階級闘争を解体させた。そして第二次大戦後、資本主義体制と「社会主義」体制との共存を固定化させた。しかし、ベトナム戦争をはじめ、後進国階級闘争が、戦後世界体制の動揺に根ざしている。

果てしなく続く核兵器競争、EECの展開と世界帝国主義の新たな競争、インド、インドネシア、中近東、アフリカにおける民族国家的統一戦線の象徴の国家の互解、日韓条約を軸として経済的、政治的に東南アジアに進出する日本、フランスの抬頭などは既成前衛組織の打ち出した平和共存を動揺させずにおれなくなっている。

これらの矛盾の進化の経過は、人類破滅への戦争の危機を次第に醸成し階級闘争におけるプロレタリアートの課題は重要としている。

だがこのことが鮮明化されたが原潜寄港の状況に対して「アメリカ帝国主義は、ベトナム侵略戦争の凶暴な拡大の中で、アジアの社会主義諸国およびアジア諸国の人民への脅迫と侵略」として日本をアメリカの永久基地化、佐藤内閣がアメリカ帝国主義の侵略と戦争の政策にますます加担していることに反対して民主勢力の統一と団結を強めようとする。帝国主義の全ての危機の進行を止揚し、プロレタリアートの課題はそこにみられるであろうか。それは困難至難といえる。

〝階級〟が、アメリカ帝国主義の戦争政策に対して「民族独立」「社会主義」国支援とされており世界資本主義の階級的利害として「アメリカに追従する佐藤内閣」「アメリカ政策に呼応する政府を強め」に、置きかえているにすぎないのである。

現在のベトナム戦争が日本の一定の「平和」状況に対して「平和主義的」「反米民族主義的」内容は、アメリカのベトナム反戦運動にみられる─主に新左翼と呼称される人々などを含め─国家との共犯関係を拒絶、社会変革を志向する方向ほどの内容を持ちえない。プロレタリアートの課題を雲散霧消せざるをえない。

〝安保闘争〟が注目をあつめている。確かに戦後最大の規模で闘われた〝安保闘争〟は政治的闘争であり、歴史的な闘争であった。

しかし、安保闘争は、日本帝国主義的な産業合理化と、東南アジアへの進出、人民への抑圧への進行という一つの体制再編強化に対して「岸退陣」「国会解散」の要求は本質がすりかえられ、岸退陣によって安保が破棄されるような幻想のとりこに労働者階級がなった。議会主義のとりこにもった。それゆえ、生産点での権力と直接対決するということの労働者階級の闘いを不十分にした。階級としての運動の主体者労働者は敗退し明確な総括を放置したままにした。そして日韓条約のとき「安保のように」「安保共闘会議」が合い言葉のようになった。

社会党は議会主義政党であるため、国民統一戦線を基調としている。日共は「従属論」─すべての悪をアメリカ帝国主義に求め、この従属体制を安保体制に求め、すべての問題を安保に集約してしまう。

そして日本帝国主義そのものに対決するのでなく、独立、民主、中立という民族民主統一戦線になるそれが「安保共闘再開」である。

これは労働者階級が階級として中心勢力になるのでなく、物質的に中心勢力になるのみで、行動の統制、画一的という没主体的な思想、階級がみられ、敗退した。

しかし既成左翼は「安保闘争、日韓闘争万歳」と日本的に解消し「統一と団結」と対置するとき、課題との断絶はひめない様相を呈して、帝国主義への対決をむずかしくさせている。絶体平和主義、反米民族主義を基軸とした原潜阻止に対して日米支配階級は、戦争遂行勢力・能力の確立化と階級的利害の貫徹として、法的合法、正当性と安全性の科学的根依をたてに、民族国家の安全として帝国主義的政治、経済・軍事的確立の一環として地固付け〝原潜、原子力空母歓迎〟している。このように現在の矛盾は階級間の矛盾であり民族間の矛盾ではない。（体制間の矛盾でもない）。反米民族主義は日本の民族全体がアメリカ帝国主義に搾取されているという発想内容は現実の日本帝国主義と日本のプロレタリアートの階級間対立関係を陰蔽するものである。

日々資本による搾取されるプロレタリアートと資本の表現としてのブルジョアジーとの関係は、民族というもとに同一ではなく、また陰蔽されるものでなくブルジョアジーとの利益とは非和解的であって、この階級の対立である。

原子力軍艦を機としての状況に際して、深まりいく資本の矛盾に対して、これの止揚、解放への課題方向はベトナム反戦の論理を自己の内部に問い直し整理し明確化にする作業をしなければならない。

生活現象の中に〈原爆〉

事実と虚構の間

井伏鱒二「黒い雨」

存在するものがある力により、非存在に転換する場面、非存在的なものが現実に存在するものに転換する場面は戦慄感を与えずにおかない。それが《原爆》となると…。

「原爆という観念、あるいは悲惨という情緒に依存」するものを感覚的に憎悪し、嫌悪し、無化しようとする江藤淳氏が推す井伏鱒二の「黒い雨」は、確かに江藤淳氏好みのようである。例えば「あなたの書く文章が、何とかイズムとかいうのになるからでしょうが」「イズムというのじゃないよ。わしのは描写の上からいって悪写実という文章じゃ。しかし、事実は事実じゃ」とやたらと虚構に事実─手段─を強調し、イズムに対抗しようと媚び、あるいは意気ごんでおられるから。井伏鱒二は思想性を云々してものれんに腕押しの感が強く、漂々とした味わいという風体で目前の〈もの〉に装飾しない語句をもち、それがユーモアによって〈もの〉をかくところに一つの魅力を感じさせる人という感がする。しかし、先のようにイズムに対抗しようと〈事実〉を至上主義的に強調し、さらに「妙な現象だ。僕は胸に手を当ててみたが恐怖を通り越していたのか動悸は平常であった」と何んども強調する。このようにイズム─に対抗しようとするイズム─事実の至上主義が事実そのもののなかに対象化の方向がみられずかえって一つの破綻がみられる「黒い雨」である。

「黒い雨」は、原爆被爆四年半の距離に姪の矢須子の縁談が持ち上がり、ところが被爆者との噂があり、それを打ち消すために主人公は八月六日〈原爆〉をめぐる姪と主人公の日記を清書して縁談先に送り付けようとする行為から始まる〈事実〉が被爆日記という手段を通じて綴られていくわけです。日記─事実─の清書という〈現在〉の行為が日記─〈過去〉─を問い、埋めるという形式である。それは不可避的な死を背った「いいしれぬ負担を感じなければならぬ」行為といわざるを得ないのであろう。

「発車寸前の電車の左側三メートルぐらいのところに、目もくらむほど強烈な光の球が見えた。同時に、真暗闇になって何も見えなくなった。瞬間に黒い幕か何かに包み込まれたようであった。「出ろ出ろ」「退け、退け」「降りろ」…（中略）─何をいっているのか意味を持つ言葉になりかねていた」とドキメンタッチに描写していく。主人公閑間は死体を焼く時「白骨のご文章」を読み、《原爆》による死体との距離を持って関り合うとともに「死体の山を真黒に見せるほど蝿が群って、風のせいか何か知らないが「わあん」という声を立てて飛びたってすぐまた死体へ群がって行った。」

「怖る怖るその屍に近づいて見ると口や鼻から蛆虫がぼろぼろ転がり落ちている。眼球にもどっさりたかっている。蛆が動きまわるので目蓋が動いているように見えるのだ」と、人の〈死〉と蝿、蛆の〈生〉の対比は、無気味なものにさせている。

そこで死という普遍的なものが個人に具体的にしかうかがうことができないということを作者の観念と虚構の融合がみられる。

「黒い雨」には格別のドラマがあるわけでもない。それは日記─事実、平常というものを基軸にゆったりとドキメンタッチに描写させてはいくが、それはあくまで手段であり、その深化がみられず《原爆》の対象化をみることはできない。

「広島が爆撃されてからは、手の平を返したように自分は矛盾だらけだと思うようになった」と主人公は書くわけだが、これは単に厭戦感が漂ってそう思っただけにしかすぎないのではなかろうか。いやそういった脆弱な感情がただよう情況であっただというのか。それを対象化し、深化し論理化するということを避けざる得ないため、そこに破綻がみられる。著者の意企に反してそういった思考様式の荒廃を認知しえないことが描いている。

「ムクリコクリの雲も住んでくれえ、わしらあ非戦闘員じゃあ、おおいもう住んでくれえ」と繰返して金切声を張りあげる女がいた。

「わしらは、国家のない国に生まれたかたのう」と溜息まじりに思うとき、溜息にしかすぎず日本帝国主義国家、天皇制ボナパルテイク国家を不問にしたものでしかないといえる。それは深化もしえず、共犯関係を絶つという論理さえの構築への志向へもないという戦時下の国民といえるかもしれない。

戦争体験で認知され、次第に内部に沈降し生成する〈死〉の観念不可避的な死の観念が現状の奇烈さにうばわれたのだろうか。そのように脆弱性は「国が滅亡するのだとなると、われわれにも覚悟がある」と今度は本土決戦へと容易に乗り換えができるのである。ところが主人公らの本土決戦ということは決して抵抗体たりえないのである。

「今度の戦争を起す組織を造えた人たちは……（中略）…話はもう言論統制は逸脱するところまで行ったので」やめるということにしかすぎないのである。

特攻出撃の犬死を祭にした蛩が本土決戦を抵抗体として把握しえるものではないだろう。焼身自殺爆攻出撃のように絶望を殺意につくりかえの作業を経過していないのだ。とともに「戦争とか平和」とは井伏鱒二は教えてくれる。「上から」の指令によって、政治家たちの協定によって終りを告げるのだと。

抵抗体として把握しえないところに降伏、敗戦後、占領軍が行っている殺人行為に「占領軍」という名をもって逃げ、暴行、殺人などの単純で無意味な繰り返しであるかをみせつけ〝階級〟をもって彼らの胸をかきむしり、行為を中止させる、最後の抵抗行動はとりえないのだよ。〈負〉けということなどは時の流れが解決するのとでも思っているから、脱線したがそういう思考様式の荒廃が著者の意企に反して日記─事実─として描かれている。

「自分は矛盾だらけだと思うようになった」などと、対象化の可能性を閉じ、単なる仕事がうまくいかないのは軍人だとか、どこかの兵隊が来て病院の薬品や繃帯をごっそり持って行ったという行為の荒廃への反発をとらせても、精神の荒廃を認知しえない国民を描くのに情緒的、観念的に依存してはいけないかもしれません。自からも加担者として見据える態度は必要です。

しかし「事実」というものに解消してしまう行為は、より事実から対象化しえず、閉鎖し、漂々とした味わいもそこなうというものではないだろうか。

イズムに対抗するのだと眼がしらを立てては、「幻想」そのものにとらわれすぎ無思想の思想とかいうものの味をそこなうであろう。

《原爆》を生活現象の中でとらえ返してみる試みが事実という現実性の地盤が現実性への関り合いに対象化しえず内在せず失なわれ去ってくる。「こんな綺麗な流れが、ここにあったのか」…（中略）…その流れのなかを鮒の子が行列をつくって、いそいそと溯っている。無数の小さな鰻の子である。見ていて実にめざましい。（中略）…「やあ、のぼるのぼる。水の匂がするようだ」と。このように「黒い雨」は実にのどかのんびりとしており、まさに万物全て流れ去るのだ。（草蔵）

オトコがえらぶ！　オトコが決める！　ナイスタイプ整髪料
丹頂マイコーム〈スペシャル〉
●ミクロ乳化整髪料
●100g 300円　●60g 200円
新発売
❶ベタテカしないでバラつかない　❹毛の質に関係なし
❷ドライヤー効果をフル発揮　❺洗髪は1回で完了
❸ハンディなポリ・チューブ入り　❻男らしい香り
丹頂男性化粧品
Symbol of Good Quality
丹頂株式会社

TANCHO
MYCOMB
SPECIAL

メガネ　あなたの知性の輝きです
森川眼鏡店
天神橋筋五　電話 35-6890